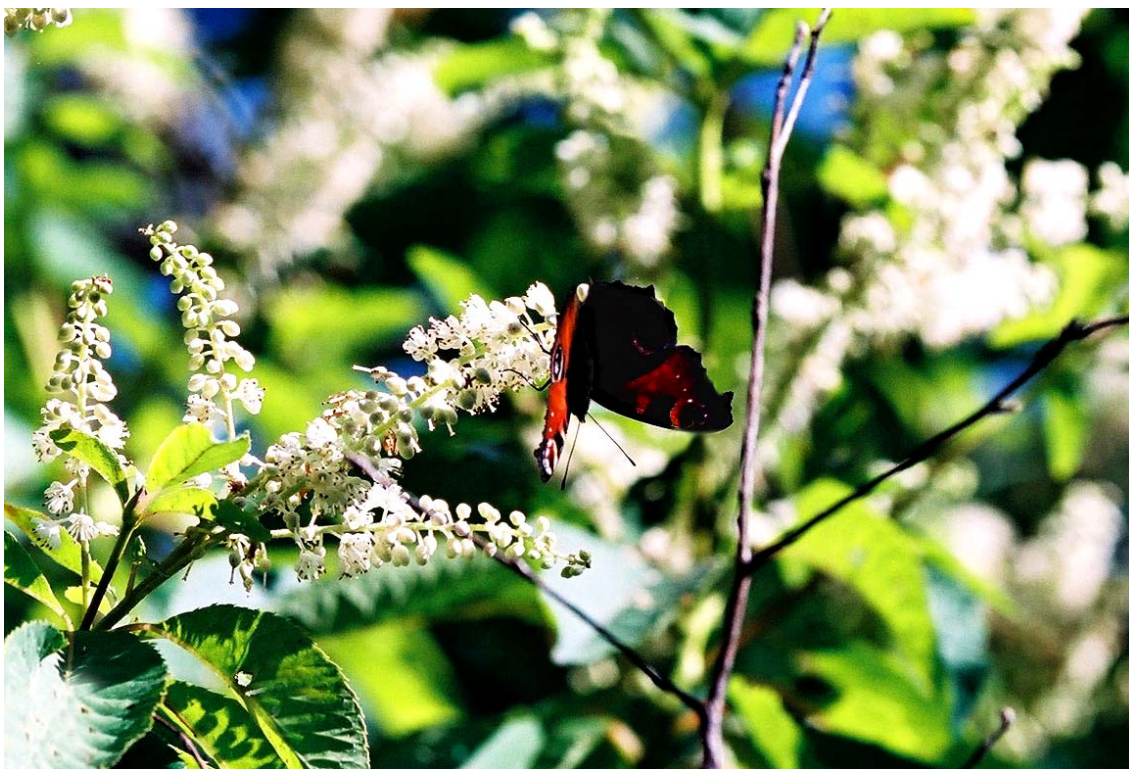


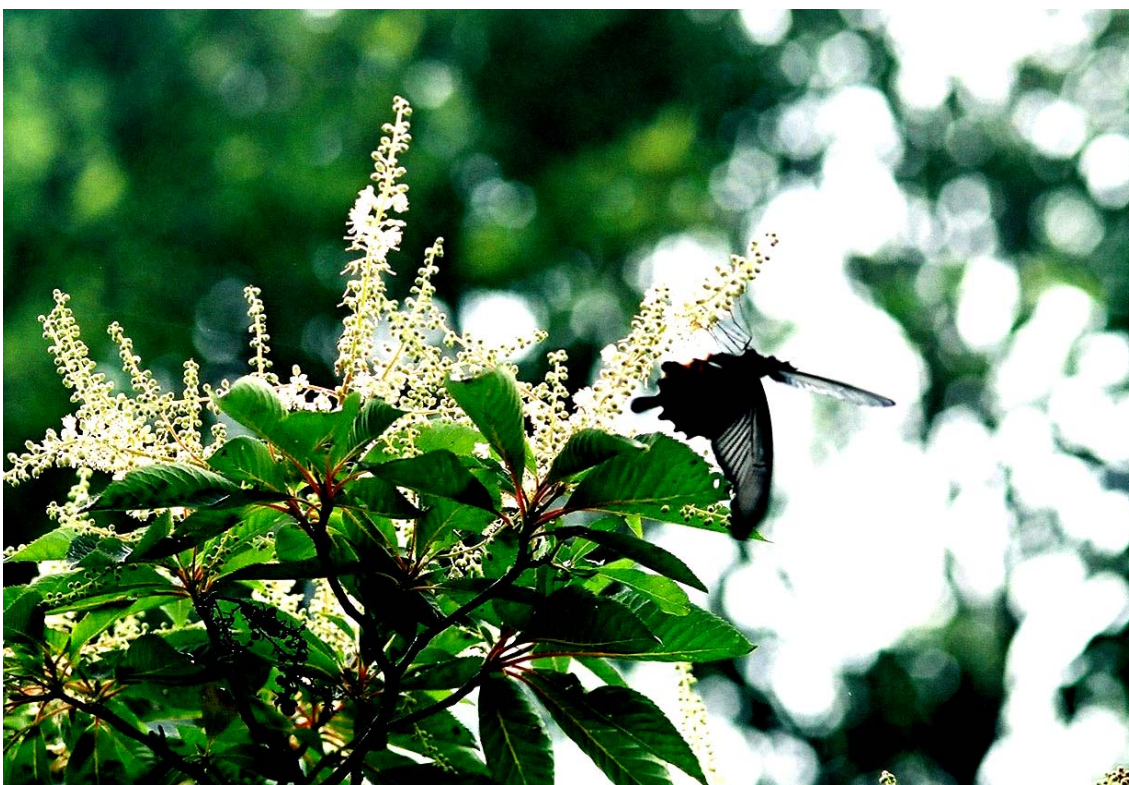
21) リョウブ=令法

リョウブはリョウブ科の落葉小高木で、北海道、本州、四国、九州の山間地に生える。『二次林』を構成することが多く、伐採にもよく耐え、株立ちとなって美しい樹形を整える。このため庭木として庭園や公園などに植えられることも少なくない。また二次林とは伐採や天災などで森林が破壊された後、残された植物や種子が作る林のことである。リョウブの仲間は世界では64種が知られているものの、日本では1属1種の植物で近縁種は他にない。高さは7~10mほどになり、樹皮が剥がれやすく幹は滑らかでサルスベリに似ている。7~8月ごろ枝先に長さ8~15cmの総状花序を数個出して、小さな白色の5弁花を多数つける。花には蜜が多いと見えて昆虫類が多く集まる。果実は直径5mmほどの球形の蒴果で、下を向けてつける。秋には褐色に熟して、多数集まって長い尾のようになる。果実の表面には毛が多く生え、熟すと3つに割れる。若葉は茹でて灰汁抜きをして食用とし、令法飯などにする。しかし実際に食べた人の話ではお世辞にもおいしいとはいえないという。葉を乾燥させると貯蔵することができたから昔は便利な食料でもあったらしい。和名の由来は中国名である『令法』を転用したもので、『令法』とは救荒食料として、採取と貯蔵を命じた令法が発せられたことに因むものである。しかし花序の形が龍のシッポに似ているために、龍尾が訛ったとの説もある。別称はジョーブノキ、サダメシ、サンナメシ、ハタツモリ、ネソノキなどで、『畑つ守』は田畑の面積に応じて割り出された量の作物を植えつけることである。いつごろの時代か定かではないが、日本でも昔はリョウブの木を植え付けることが義務付けられたことによるものであろう。ネソノキは柴や薪、粗朶(ソダ)などを縛るために用いられるためで**絢麻(ネソ)**と記し、ミツマタやカマツカ、フジなども同名で呼ばれている。学名は『*Clethra barbinervis*』で、属名はハンノキ科の古代ギリシャ名で、葉の形が似ているために転用された。種小辞は脈にヒゲがあるという意味である。中国では前述の如く『令法』、または『山茶科』と呼ぶ。

リョウブは食料にされた他、樹皮が美しいために庭木として植えられることもあるが、最近ではあまり利用されることのない木である。しかし病虫害に犯されることもなく、刈り込みにも絶えてよく発芽し、また株立ちにすると、ことのほか美しい樹形になる。公園や街路樹として、また庭木としてももっともっと利用して欲しい木である。このため苗木もあまり売られていない。埼玉県の深谷市あたりでは、たまに見ることができる。ただ那須や蓼科、軽井沢などの別荘地の山林では、自生するものが多く、時には厄介者にされている。というのも別荘地として切り開くと前述の如く二次林として必ずこのリョウブやムラサキシキブ、コナラ、アカマツなどが育ち始めるからである。これを移植すれば難なく入手できるし、またよく活着する。材は幹の美しさから床柱などに用いられるほか、建築材料として利用され、器具や細工もの、上質の薪炭などにも利用された。



リョウブの花にやって来たクジャクチョウ。リョウブの花には蜜が多いと見えて、この花の季節に発生する蝶はほとんどこの花を訪ねて来る(長野県小海町松原湖)。



リョウブの花には蝶類が多く集まる。クロアゲハが吸蜜している(埼玉県嵐山町)。



リョウブの花は長い『総状花序』となる(埼玉県深谷市)。

[目次に戻る](#)